作家に語られた震災――多和田葉子を中心に

台湾大学　范　淑文

2011 年 3 月 11 日に日本の東北地方で起きた大地震及び、それによる原発の災害は日本のみならず、世界各国でも身近な問題と捉えられるほど地球レベルの大問題と見なされている。

そうした厳しい災害問題において、環境研究者は言うまでもなく、文学創作者たちまでもが最前線に立ち、何十年も先の問題を予想しながら集合体の意識への警鐘として創作に臨んでいる。例えば、川上弘美や多和田葉子などをはじめ、地震発生後、直ちに震災の惨たらしさを描いたり震災が引き起こした人類の生存問題を描いたりした作家が続出している。一方、古代からの『方丈記』や田山花袋の『東京震災記』などが災害文学の枠組みのもとで新たに研究者に注目されるようになった。

本発表では、3・11 東日本大震災や原発問題をいち早く最も深刻に描いた多和田葉子の作品『献灯使』を主な考察の対象とし、この大惨事が作家の眼に如何に映ったかを探ってみる。村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』や川上弘美の『神様 2011』の描写対象を意識しながら、『献灯使』における語りの視点、及び人物や場所の設定に注目しながら多和田葉子が語ろうとする問題、それは自然や社会と如何に関わっているかを明らかにしてみる。